

「捏造」を巡る闘争としての書く行為

ニコラス・ボルン『捏造』

杵 渕 博 樹

1. 序

ニコラス・ボルン (1937-1979) のロマン『捏造』は、1979年に発表された。¹⁾ この作品は当時のレバノン内戦を扱っているが、ボルンは執筆にあたって、1977年、二か月にわたってベイルートに滞在している。²⁾ 本作は出版後間もない1981年にフォルカー・シュレンドルフ Volker Schlöndorff (1939) によって映画化されているが³⁾、2009年にはバイエルン放送によってラジオドラマ化され、再び脚光を浴びている。⁴⁾

本論では、まずこの作品のタイトルとなっている「捏造」Fälschungが、作品内でどのようなものとして現れているかを整理し、作品全体の展開を、主人公がこの「捏造」の克服を求める試みとして解釈する。その主人公の動きには、一貫して、「捏造」への不満と同時に「当事者化」への欲求が見られる。主人公ラッシュェンは、傍観者・観察者・部外者の位置を脱し、「当事者」となることを求めるが、この「当事者化」はある特殊な仕方を実現される。本論では、この「捏造」概念および「当事者化」の特徴を手がかりに、作品全体の提示する情景の思想的意味を探る。

2. 作品概要

1976年2月、ジャーナリストである主人公ゲオルク・ラッシュェンは、内戦下のベイルートに渡る。そこではキリスト教徒の軍閥、イスラム教徒、パレスチナ難民がそれぞれ対立し、出口の見えない殺戮の応酬が続いていた。⁵⁾ 作品の主要部分は主人公が滞在するレバ

-
- 1) 本論では、以下の版を使用し、引用・参照指示の際にはカッコ内にページ数のみを掲げる。Born, Nicolas: Die Fälschung. Roman. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt Taschenbuch Verlag) 1993.
 - 2) Vgl. Bosse, Heinrich, und Lampen, Ulrich A.: Das Hineinspringen in die Totschlägerreihe: Nicolas Borns Roman „Die Fälschung“ München 1991. S.11. 現地の取材経験のあるジャーナリストとの協力や作家本人による現地取材などの手法については、1970年代のドキュメンタリー文学の影響も指摘されている。Vgl. Lützel, Paul Michael: Bürgerkrieg Global. Menschenrechtsethos und deutschsprachiger Gegenwartsroman. München 2009. S.187.
 - 3) Vgl. Töteberg, Michael: Die doppelte Fälschung. Volker Schlöndorff verfilmt einen Roman von Nicolas Born. In: Text + Kritik. Heft 170. Nicolas Born. München 2006. S.70ff.
 - 4) 「『捏造』の発表は三十年前だが、中東における現在の出来事を見れば、この小説が今日なおアクチュアルであるかどうかなどという問は本来無用である。」Vgl. Bunk, Lutz: Zerbrochene Identität. Nicolas Born: „Die Fälschung“ (Hörbuch), Hoffmann & Campe Verlag, Hamburg 2009, fünf CDs: in www.dradio.de. 27.03.2009.

ノン舞台として展開し、冒頭と末尾に彼の所属する出版社のあるハンブルク、および彼の自宅のあるハンブルク郊外での場面が置かれる。

ラッシュェンの妻グレタは写真家で、夫婦ともに自宅を離れていることが多く、夫婦関係は疎遠になっている。ラッシュェンはなんらかの仕方での現状を打開したいと考えており、ベイルート滞在中も妻グレタと自分との演じた場面を繰り返し回想し、また、彼女あてに二通の手紙を書く。この手紙を書く様子とその内容は詳しく描かれ、この作品の重要なモチーフのひとつとなっている。

その一方で、ラッシュェンはベイルートのドイツ大使館に勤めるドイツ人女性アリアーネと親密になる。ラッシュェンは前年12月にもすでに一度ベイルートに取材に来ており、アリアーネはそのとき以来の知り合いで、当初は現地の案内役であった。彼女は現地の男性と結婚していたが、その夫は亡くなり、今は未亡人である。今回のレバノン取材でも、ラッシュェンはまっさきに彼女と連絡を取るが、当初の建前としては取材が目的で、彼の心理も曖昧である。しかし、まもなくアリアーネへの恋愛感情が明確になり、ラッシュェンはアリアーネ宅に招かれて関係を結ぶ。

アリアーネに子どもはなく、彼女は養子を取ることに執着していた。これは亡くなった夫の遺志でもある。人種の問題があって計画は難航するが、ついに修道院で保護されていた戦争孤児の黒い肌の赤ん坊を引き取ることに成功する。このときラッシュェンは同行し、主観的にはその子どもとの特別な結びつきと、アリアーネとの関係の親密化を確信するが、その幻想はすぐに否定される。アリアーネは子どもとふたりきりで過ごすことを主張して、ラッシュェンと距離を置き、もうひとりの恋人であったアラブ人男性との関係を優先する。

妻グレタと離婚し、アリアーネとともにアラブに定住するつもりだったラッシュェンはあてがはずれ、結局ハンブルクに戻る。彼はまず会社を訪れて辞表を書き、その後帰宅する。最後に描かれる、郊外の自宅で家族と過ごす数日は、表面的には穏やかだが、妻との関係は冷え切っている。作品末尾、ひとり外出して酒を飲んで帰り、すでにベッドで眠っている妻のとなりへ潜り込むラッシュェンの様子からは、問題解決の兆しは読み取れない。

取材および執筆に関する場面は、上記のアリアーネとの経緯と並行して描かれる。ベイルート市街の前線は日々移動し、夜間に戦闘があり、昼間は一見まるで何事もなかったかのように日常生活が営まれている。対立する勢力同士の境界線を越える移動や、夜間の外出は危険を伴う。その結果、移動や外出の場面には、取材目的の場合にも、アリアーネとの接触や同行を目的とする場合にも、この特殊な状況のジャーナリスティックな描写が含まれる。市街および近郊での体験としては、白骨死体の山や焼かれた遺体の目撃、各陣営による検問、突然の狙撃、夜間の銃撃戦からの避難などの様子が語られる。主要な遠征取材としては、軍閥本拠地に向いてのインタビュー、PLOの作戦行動の同行取材などが行われる。

5) Vgl. Lützel, S.185-187. Bosse und Lampen, S.16-18.

3. 捏造の諸相

作品のタイトル、および主人公の職業設定と主要舞台は、報道現場におけるなんらかの具体的な捏造の事例を中心にした物語展開を予想させるが、この予想は裏切られる。実際には、物語を通して、一般的な意味での捏造、すなわち虚偽報道、事実と反する報道にかかわるような事件は起こらない。⁶⁾

しかし、ラッシュェンは、自分が「捏造」に係わっているとの自責の念を抱いており、作品全体が、この主人公の、自分の問題としての「捏造」との葛藤を巡って展開されている。では、この作品で「捏造」と呼ばれているものは一体何なのか。⁷⁾

この作品における「捏造」には、一読して、ふたつの次元が存在することがわかる。すなわち、主人公ラッシュェンの私的な人間関係の次元と、ジャーナリストとしての仕事の次元である。本論では、主人公ラッシュェンの人物像を手がかりにして考察を展開する方針に従い、前者を「私生活上の捏造」、後者を「職業上の捏造」と呼ぶ。⁸⁾

まず、「私生活上の捏造」は、主にラッシュェンの夫婦生活の事実上の破綻と、そこに端的に現れたラッシュェンの対人関係パターンの問題にかかわる。ラッシュェンの夫婦関係は危機的状況にあるが、彼の回想のなかで提示されるその情景の断片において顕著なのは、問題解決のための対話の欠如である。ラッシュェンはグレタがほかの男と寝ていることに気づいているし (133)、ラッシュェンもほかの女と寝るが (9)、お互いにその問題に言及することはない。ラッシュェンは妻にすでに見捨てられていると感じており、いつ妻が出て行って

6) Bosseは、インタビュー状況についての潤色、すなわち、現場にあった漫画雑誌を目撃しただけで (103)、インタビュー対象の人物がその愛読者であると断定するような記述 (124) を、「ささやかな嘘」と称し、「捏造」の例として挙げているが、これもやはり一般的な意味での捏造であるとは言えないだろう。また、この例は、そのインタビューを中心とする記事の内容に本質的変更を加えるものではなく、同箇所でのその記述に関してラッシュェンが殊更に自己批判することもない以上、彼が全編を通して深刻に悩む「捏造」の問題の核心からは遠い。Vgl. Bosse und Lampen, S.34-35.

7) Lützelzerによれば、実際の戦場を特徴づける「肉体的な痛みや身体部位の切断などをジャーナリストの言葉に置き換える」という本来不適切な作業、そのような「極限状態を写真雑誌の言葉で語る」という本来不可能な作業にジャーナリストが適応した結果として生じるのが、本作における「捏造」である。Vgl. Lützelzer, S.192. この理解は、本作のジャーナリズム批判の文脈を端的に反映している。本論では、この基本理解における「捏造」と、この同じ「捏造」概念の、そこからはみだす部分との関係に重点を置いて議論を進める。

8) Bosseは、この作品における「捏造」を「実存的捏造」と「集団的捏造」という概念で分類し、相互に影響を与え合うものと位置づけている。Vgl. Bosse und Lampen, S.41-46. しかし、この方法に従うと、本作に見られるジャーナリズム批判の登場人物ラッシュェンの見解としての性格が軽視されざるを得ず、また、ラッシュェン個人の具体的な行動の物語展開上のその都度の意味よりも、彼の人格的特性のより普遍的なモデルへの還元が重視される傾向が生じる。物語展開に即して「当事者化」のダイナミズムに注目し、「傍観者性」と「当事者化」の問題をより具体的に跡付ける方針を持つ本論においては、あえて「私生活上の捏造」とその背景としての「実存」レベルでの傍観者性とをさしあたり区別して議論を進め、また、「捏造」の、ジャーナリズムの構造的問題により密接に係わる側面についても、飽くまでもラッシュェンの主観にとっての意味を基準にして整理する意図から「職業上の捏造」と称する。

もおかしくないと考えているが、いっぽうでその疎外感は妻への関心と欲望を強めている(15,33)。

たとえば、彼ら夫妻が田舎に家を買ったときのことだ。当初はあまり馴染めなかったラッセンが、意識的な努力を重ねた上で、次第にその環境とそこでの生活を好むようになったのに対して、妻グレタはすぐに飽きてしまった。そして彼女のこの環境への拒絶を、ラッセンは自分への拒絶として受け止め、ひどく失望する。ここで彼が問題にするのは、その際の自分の対応である。

自分は彼女に対してあまりにもわずかな抵抗しかしなかった、それは自分が理解しすぎるからであり、そうでなくともいつも素早く何かを洞察しようとする傾向があるからだ、と彼は思った。(94)

お互いの事情がわかりすぎてしまうために、示すべき抵抗を示さない、つまり、自分の感情を隠してしまうのである。全編を通じて、感情や考えを伝えようとしないこの自分の態度自体については、ラッセンは一義的な評価を下さない。しかし、客観的には、離婚によってこの状況を終わらせる試みが描かれている以上、この彼の態度を含む夫婦関係はやはり事実上否定的に評価されていると言える。また、出張先からの手紙による離婚の提案(260)は、結局、直接話し合う機会の忌避であり、ラッセンの傍観者的態度は一貫している。

しかし、彼の傍観者的態度、当事者化の回避の傾向は、すでに幼年時代に現れていた。

おまえが子供のころからどれほど感じやすい人間だったとしても、だからこそ報告者としてのおまえは感受性を欠くモンスターになってしまったんじゃないのか。(186)

また、その態度は、妻に対するのと同様、アリアーネを前にしても基本的には変わらない。

(…)彼女は言った、なんてきれいな肌なのかしら、あたしあなたの手を長いこと眺められる、すごくあたしになじんでいて、でも、あなたの顔は違う、そこには隠れ棲んでるものが多すぎる、裏切りが多すぎるし、留保も多すぎる、それにあなたはおそろしく用心深くしてる。(133)

ここでの「裏切り」や「留保」、「用心深さ」は、アリアーネにとっての当面の文脈においては、ラッセンに妻子があること、家庭があることと関係した評価かもしれないが、より本質的には、ラッセンの人間関係における根本的態度に由来している。彼女の指摘は、ラッセンの自己評価と一致しているのだ。アリアーネへの執着を自覚しながら、ラッセンは「義務の感覚を嫌い」、「恐れている」。他方、「彼は一度しがみついた相手をま

た離そうとしない」。それにもかかわらず、実際には、「彼はすべてのひとをまた離してしまふ」。そして「思い出は残したくないし、なにも懸念したくない」のである。⁹⁾ グレタとの関係も、アリアーネとの関係も同様に、このような姿勢の延長上にある。

次に「職業上の捏造」だが、これは、ジャーナリストとしての主人公の、自分の仕事に関する個人的葛藤と、彼の展開する、より一般的なジャーナリズム批判というふたつの要素から成る。まず、ここでの議論を始めるにあたって、作者ニコラス・ボルンの、本作『捏造』とは別のテキストにおける記述を見てみよう。

残酷なのは良心を持ちながらなにひとつ
妨げられないことだ。その良心は
一種の忘却であり、もうひとつの忘却は
考えなしに党派にはしることだ。
良心も忘却もなしで私は自分とやっていきたい。¹⁰⁾

ここで念頭に置かれているのは、戦争のような悲惨な出来事に関する情報の発信や受容の場面であろう。そしてこの良心は、「何も止められない」ことを忘れることができ初めて成立する。ここで残酷さを避けるためには、実際にその悲惨を止められればよいのだろうが、ここではその可能性は想定されない。もし悲惨が止めえないものなのであれば、党派性は無思慮な行動を体現することになる。あるいは、悲惨を止める意図を伴う党派性は、現実の忘却に他ならない。だから、ここでの「私」ichは「良心も忘却もなし」でいたい、言い換えれば、そのような意味での良心なしで、現実を直視していたい。そのような態度の実現の可能性の如何はともかく、ここにはボルンの考える認識と行動に関するモラルのひとつの基準が示されていると言えるだろう。

また、ボルンは、あるエッセイで、「悲惨の認識が悲惨を変えるという希望」を否定し、「状況を書くことによるその再生産」は、当該の「その状況の再生産に貢献する」と述べている。¹¹⁾ だとすればまさに戦争ジャーナリズムは悲惨な状況に依存したビジネスに過ぎず、ボルンのモラルにかなうものとはなりえない。

『捏造』におけるジャーナリズム批判もまた、これらの例に連なるものと言える。ここ

9) 「彼はアリアーネと一緒にいたかったが、そうして一緒にいることを怖れてもいた。義務は負いたくなかったし、義務感も抱きたくなかった。この感覚を彼は義務そのものよりも怖れていた。彼は一度しがみついた相手を二度と手放そうとしない傾向があった。彼はすべてのひとをまた手放してしまった。そしてそのあとはせめて思い出に存在してほしくなかったし、もうなにひとつ懸念しなくなかった。」(63)

10) Vgl. Born, Nicolas: *Bewegungen, neue Organe*. 1976. In: Born, Nicolas: *Gedichte*. Hg. v. Katharina Born. Göttingen 2004. S.224.

11) 「彼らは目の当たりにした状況を、悲惨の認識が悲惨を《変える》ことへのバカげた希望のもとに書く。その状況の再生産に彼らは貢献しているのだ。その状況を書きつつ再生産すること。」Vgl. Born, Nicolas: *Ist die Literatur auf die Misere abonniert? Bemerkungen zu Gesellschaftskritik und Utopie in der Literatur*. In: *Die Welt der Maschiene. Aufsätze und Reden*. Reinbek bei Hamburg 1980. S.47-54. Hier, S.47.

では、たとえば、「世界報道は、それがその反響によって虐殺を勢いづかせるときですら不可欠なものだった」のであり、「すべてが報じられるべく求められ、ようやくそのあとに最終的破滅となるのだった。」(241) このジャーナリズム観、さらに言えば世界観を前提にするなら、そのメカニズムに組み込まれることに疑問を感じ、抵抗するラッシェンの感覚は突飛なものではない。

また、ラッシェンは、このような欺瞞的な商業主義に組み込まれた自身の執筆姿勢に、妻グレタの気持ちが彼から離れてしまったひとつの要因を見ている。以前は彼の記事を熱心に読んでくれた彼女も、やがてそこに情報価値しか見てくれなくなってしまった(89,264)。逆に言えば、その記事がどう書かれているかに興味を持ってくれなくなったのである。ラッシェンは自分の書くものの批判的な身振りを伴うマンネリ化を見透かされていると感じる(264)。¹²⁾

しかし、既に確認したように、ラッシェンが自身の職業的営為に関して問題視しているのは、システムに組み込まれることによって生じる傾向ばかりではなく、彼本来の認識一般における構えであった。この構えの、ジャーナリストとしての仕事の現場における実現形態が端的に述べられているのが以下の箇所である。

真実が、彼を駆り立てると同時に彼の目の前へ厚いガラスの保護壁となって割り込んでくるのであり、それで彼の見る行為は不毛なものになるのだった。それはつながりを欠く見る行為であり続けたが、彼にとって、純粋な見る行為であると言ってもよかった。感情は、自分の体の真実はどこに残っている、痛みは、癒されえない慰めのない共感はどこに、そして世界の生についての、自分自身の生についての、無力な憤りは、憤るような悲しみはどこにある、ラッシェン、それはおまえを打ちのめさずにはおこななかったはずだ。(187-188)

ここで展開される論理には、制度としての商業主義的ジャーナリズムに対する批判は含まれない。ここで問題にされるのは、「真実」とラッシェン個人との関係に限られている。見る者としての彼は、彼自身および彼が向き合う世界の生との感情的・感覚的結びつきを切り捨ててしまうが、それが彼を圧倒しうる、彼にとって危険な要素であることを、彼は自覚している。これは認識における心理的防衛機制を巡るジレンマなのである。全的な「見る行為 Sehen」が打ちのめすであろう彼は、傍観者としての彼である。

すべての人間がそれほど当たり前であるのに、彼だけがそうではなかった。その彼にとってはもはやなにひとつ現実とはならず、それゆえもうすぐにすべてを同様に非現実だということにしてしまった。すべてはそこにありながら、そこにはなかった。(121)

12) そもそも彼は自分が報道写真に添える解説を「捏造」とみなしていた(89)。

その都度の現場において現実性を欠く存在、あるいは現場にあって現場にいない者として描写されるこの彼の姿は、先に挙げた全的な認識の欠如を嘆く場面においてと同様、そのような現状に対する不満を暗示する。さらに、別の箇所では、この同じ状況が、その孕む道義的問題を強調する仕方と言い換えられている。

すべて生じたもの、あるいは主張されたものは自ずから語り、すべては一時に説得力を得て、それに対してできることはほとんどなかった。そして彼はすべてを洞察することができて、了承していた、それをひどいことだと思いながら、やはり了承していたのだ。(182-183)

直前に掲げた引用との関連で言えば、現実性を欠く者は、現実に対して、現実のレベルで直接働きかけることができないのだ。この事態について、ラッシュェンのモラルはここでまたひととき厳しい評価を下していると言える。ここには、当事者として出来事に関与できない傍観者としての自分に対する彼の苛立ちが端的に現れている。

ところで、ラッシュェンは一度だけ彼の言う「捏造」と無縁な記事を書くことに成功している(219-220)。つまり、彼自身の徹底的に悲観的なジャーナリズム観にもかかわらず、また、ラッシュェン特有の傍観者的傾向による制約にも係わらず、彼の「捏造」に加担するがゆえの苦悩は軽減されうるのである。ただし、この体験は、欺瞞的ジャーナリズムへの「嫌悪」Ekel (219) をひとつの契機としている可能性こそ否めないものの、その実現の理由は彼自身にもわからない。

それはすべて体験であった。それはあたかもラッシュェンが突然、初めて、ひとつの出来事へと、天使によって導かれたかのようなようであった。(219)

それは、「天使によって」という表現からもわかるように、主体的な工夫や努力で獲得されるようなものではなく、おそらくは偶然もたらされた特殊な条件の下で実現したものである。だとすれば、立て続けにそのような非捏造的なる記事を書くことはできないとラッシュェンが考えるのも当然だろう(238)。絶え間なく書き続け、報じ続けることが求められているとしたら、再び「捏造」的な報告者に墮することは避けられないだろう。ここでは、ジャーナリズム自体が不可避的に伴うとされる「捏造」と、それを決定的に支えてしまうものとしての個々のジャーナリストのレベルでの「捏造」的態度とは、さしあたり、分けて考えることができるが、後者の相対化が前者の構造的克服につながる可能性は低いと言える。

4.. 傍観者性とその克服としての当事者化

この作品における「捏造」は、これを構成する上述のふたつの次元を通じて、この問題

に悩む主人公ラッシェンにとって、彼自身の傍観者的な態度に結びついている。すなわち、本来自分がかかわるべき問題、かかわる意志をもっていたはずの問題に対して、実際に働きかけることなく、巻き込まれることを避け、もっぱら関係する相手や状況を観察するばかりで、けっして本当の意味での当事者となろうとしない、あるいは当事者としてふるまおうとしない態度である。

アリアーネへの愛着、あるいは彼女との生活への希望を直接表明する代わりに、帰国へのためらいと彼らの母国ドイツに対する違和感に言及するラッシェンに対して、アリアーネは、「それならアラブ人になればいい」と挑発する¹³⁾。この表現は、この状況下で、ラッシェンの観察者・傍観者としての存在様式に対する見事なアンチテーゼとなっている。そしてその後のラッシェンは、この挑発に応ずるかのような行動を重ねるわけだが、そこは内戦下のレバノンである。ラッシェンの内的論理に従った当事者化の実践には危険な側面が伴う。今、当地に定住することは、あえて内戦に巻き込まれること、おそらくは武器を取って殺戮の応酬に加わることを意味しうる。そもそも彼は、自分と殺戮者との間の、同じ人間としての近さ、互いに交換可能な存在としての側面を自覚している。¹⁴⁾

戦士たちは今天使のように隠れ家で眠っている、殺し屋どもが天使のようにだ。なぜ自分はそのひとりではないのだろうか？ (121)

ラッシェンが「殺し屋」という表現のもとで念頭に置いているのは、武器を取って内戦に係わっている男たちすべてである。彼は自分がその一員であってもおかしくないと考えた。これは彼自身に本来的に備わった暴力の問題である。

そうだ、なぜ自分の指の、頭の、ナイフの暴力はそこに存在しないかのように、消え入りそうになっているのか？ それは自分があの連中と根本的に違うなにかを指向しているからなどではない、自分の暴力が、それを用いることがないからと言って、より純粹であるからなどではない。それはただ、自分を押しとどめ、すっかり宥めてしまう、あの慎重さの故だ。自分を宥めているのは自分自身の頭だが、そこには行動しないことの

13) 「そうすぐにドイツに帰ろうとは思わないよ、とラッシェンは言った。ドイツ、なんていう響きだ。なあ、なんて不快に響くんだらう、ドイツっていうのは、なんて鋼鉄みたいに、なんて情け容赦なく、頑固に響くんだ。相変わらず轟き渡ってる。／ならここにいなさいよ、とアリアーネは言った。アラブ人になりなさいよ、あたしみたいに。／彼は笑った、しかしその瞬間、実は動揺していた。」(131)

14) ラッシェンは大量殺戮の首謀者とのインタビュー記事をまとめながら自問する。「なぜ、この似非將軍についてこうもたやすく書けてしまうのだろうか？ ひょっとしたらこの人物を忌み嫌っているのは、この人物のことがあまりにもよく理解できてしまうからなのかもしれない。他方で、この理解についてはいずれにせよどうすることもできなかったし、何も書けなかった。」(123)ここに暗示されているのは、同質のもの共有であり、同じ人間としての近さである。より一般的には、残虐行為に対し、当面は強く反感を覚え、それを批判する意図で記事を書こうとしているジャーナリストたちが、同様の行為の実行者になりうるという潜在的可能性も、この記述からは連想されうる。

空っぽの空間が、麻痺した核が、あらゆる出来事からの遠さがある。(121)

ここに描写される暴力の抑制の様子は、それが「出来事からの遠さ」と解釈されることによって、明らかに否定的なニュアンスを帯びている。端的に言えば、ラッシュェンはそれが「殺し屋ども」であっても、出来事に対する彼らの当事者性を肯定的に捉えずにられない。もともと自身の実存的レベルでの傍観者性を問題視していた彼にとっては、とりわけ、なんらかの仕方での暴力の実践を、当事者化の条件としてとらえずにられないのである。この文脈において無視できないのは、バイルートへの出発前のわずかな紙数のなかですでに、すなわち、ドイツでの日常生活を背景にして、この主人公ラッシュェンの暴力性に関する記述が見られる点である。¹⁵⁾ また、アリアーネに裏切られたと感じたときも、彼は彼女の顔を殴りつけたいと考えている(249)¹⁶⁾。作者ボルンは、この主人公を通して、日常における男たちの暴力と、戦場における殺戮とのその本質における結びつきを示そうとしているのである。

他方、彼は戦場にあっても、殺人そのものに対する強い反感を維持している。PLOの同行取材の際、彼の目の前で部隊が狙撃されて兵士が負傷し、これを受けてすぐにこの狙撃が行われた建物から女性と子どもを含む家族が連行され、そのうち、男と少年はその場で銃殺されるが、ラッシュェンは、これを止めさせようとして制されている(179-181)。このときの体験が、先に触れた「非捏造的」なる記事に結実することになるのだが、ここでラッシュェンが展開する論理は、目的に対する手段としての殺人一般の原理的否定である。

それにもかかわらず、彼はパレスチナ人たちに憤っていた。シンバシーを抱いている彼の気持ちを彼らが傷つけたからだ。彼らの要求はもはや正当なものではなく、非難すべきものとなっていた。なぜならその手段が非難すべきものだったからだ。いずれにせよラッシュェンの考えによれば、この世で達せられた、あるいは、達せられようとしている目的はもはやなにひとつ評価されえず、なお評価されるのは、ただその方法、運動のあり方のみなのであった。今や彼はもう区別する気になれず、すべてに対して失格宣言をしてやりたかった。(183)

内戦全体の構図で言えば、パレスチナ人は明らかに大量殺戮の被害者だが、報復闘争において、規模や方法はともかくとして、同じように殺戮に手を染めれば、正当性は失われ

15) ラッシュェンは、自宅のボイラーの不調を受けて配管工を呼ぶが、やる気のない様子に腹を立て、この男の頭を両手でつかんで顔をボイラーに打ちつける。この男は顔面を負傷して出血し、呆然として引き上げていく(13)。

16) この記述には伏線がある。ドイツへの出発前、ラッシュェンは取材時の相棒であるカメラマン、ホフマンのガールフレンドと寝るが、このとき、ホフマンが彼女を殴っているに違いないと彼は考える(24)。このカメラマンの一種傍若無人ではあるが迷いのない割り切った仕事ぶりに対して、ラッシュェンは軽蔑と同時に劣等感を抱いている(22-23)。この文脈では、女性を殴るという暴力行為もまた、現実への直接的働きかけ、すなわち当事者化の一環としての意味を担う。

るという論理である。手段が目的によって正当化されることはないというのだ。しかし、殺人一般を原理的に否定するこのモラルは、殺人に対する強い憤りによって、逆に殺人の正当化へと転化する。現地での取材で一貫して重要な役割を果たす、初老のコーディネーター、ルドニクについて、ラッシュェンは以下のような感想を持つ。

こんな人間は殺してやってもいい、とラッシュェンは思った。それほどまでにうまく現実に対応していることへの報復として、それほどまでに多くを見ておきながら、ほとんどのなにも感じてこなかったことに対する報復として。こんな人間をこれ以上増やしてはいけない。その種を撒き散らせておいてはいけない。(167)

このルドニクは、コンドル部隊に在籍経験のある元パイロットという経歴(69)からナチ党員としての過去が暗示されており、この内戦でも、敵対する複数の陣営にコネクションを持つ特異な存在である。また、今回のペイルート滞在での主要な取材はこのルドニクの仲介によるものであり、その企画はカメラマンのホフマンが単独で行っており、ラッシュェンは一切関わっていない。独特の仕方であれ、少なくとも報道という仕事に関してはモラリストであるラッシュェンが、この状況および、ルドニクという人物自体に反感を抱くのは当然かもしれないが、報復殺人が横行する内戦の背景のもとでは、ラッシュェンが「こんな人間なら殺せる」などという生々しい表現で殺害を想像する記述は強いインパクトを持つ。

しかし、「ほとんどのなにもを感じることもなく、あまりにも多くを見た」という条件は、ラッシュェンがこのまま「職業上の捏造」に関与した場合の末路として予感している自分の姿に合致する。ラッシュェンのモラルに照らせば、「捏造」への無批判な加担の積み重ねは死に値するのだ。

以上見てきたように、ラッシュェンは自らの傍観者性への不満と、それに起因する当事者化への欲求を抱えているが、内戦という特殊な状況を背景にして、この当事者化の問題は、暴力の実践の要求として浮かび上がってくる。この展開に彼自身が元来抱えていた暴力性が流入し、日常における暴力性と戦場における殺戮との同質性が暗示される構図が形成され、さらに、この構図のもとで、暴力と殺人とを原理的に否定するモラルと、殺人者および傍観者への嫌悪と怒りを動機とする、殺人への願望とが提示されていた。こうして、ラッシュェンにとっての当事者化の実践手段が絞り込まれていくのである。

彼はアリアーネに訪問を許された約束の日を待たず、銃弾の飛び交う夜間、命の危険を冒してアリアーネの住む集合住宅の周りをうろつき、彼女が別の男を見送る場面を目撃する。

右手はいくらか膨らむようにして腰に添えられていた。その下にはピストルの短い銃身が見えた。彼らが抱き合いキスをするとき、ラッシュェンは、ピストルを支えるその男の手の上に彼女が手をのせるのを見た。(248)

彼の気持ちを昂ぶらせたのは、先ほど目にしたもの、すなわち、彼女が武器を持つ手を愛撫していた様子であった。(250)

ピストルを携行したこのアラブ人の恋人こそ、半ばアリアーネとの関係のために、半ば職業上の葛藤から逃れるためにラッシュェンの模索する当事者化の条件を体現していると言える。このアラブ人は、殺人を前提とした武器を身に帯びつつ、自分の問題として内戦に加わっており、しかも、アリアーネは、まさにその武器を持つ手を愛撫する。すなわち、この構図の持つラッシュェンにとっての意味を象徴的に解釈するなら、彼女はこの男の殺人者としての暴力性をこそ肯定的に評価し、愛しているのである。¹⁷⁾

5. 当事者化の試みの挫折

ラッシュェンの当事者化は、アリアーネとの関係について言えば、妻グレタとの離婚の決意によって動き出す。しかし、彼はさらに自分の殺人と暴力に対する態度の問題を乗り越えなければならなかった。先に見たように、彼は、個人的な感情を伴う動機にしたがって人を殴ることもあれば、殺してやりたいと考えることもある。しかし、目的に対する手段としての殺人は、その目的の歴史的正当性の如何を問わず、容認しない。主人公ラッシュェンにこのような事情を克服させるために、作者ニコラス・ボルンは、入念に伏線を敷いた上で、それでもなお不自然な、あるいは非常に奇妙な、そしてグロテスクなエピソードを挿入する。

ラッシュェンは、アリアーネのアラブ人の恋人が彼女の家から出てくるところを目撃した晩の翌日、妻グレタへの手紙で離婚を提案し、その晩ふたたび戦闘の続く市街に出てゆくが(265ff)、このとき彼はナイフを携行している(271)。この護身用のナイフは彼がドイツから持参し、バイルート到着後最初の外出時、および軍閥領袖のインタビューの際に携帯して以降、ホテルの自室に放置してあったものだ。¹⁸⁾

その際、ラッシュェンは激しい戦闘に巻き込まれて負傷し、住民に助けられて地下室に避難する(266)。集合住宅の地下室は避難した住民でいっぱいになっており、足の踏み場もない(267ff)。ここでも彼は自分が当事者ではないことを負い目に感じているが、注目すべき点は、その当事者性の基準が、端的に武器の携行の有無として表現されていることである。

17) この場面は後に再現される。アリアーネ宅で、ラッシュェンとこのアラブ人の愛人とが鉢合わせした際、彼女は再びこの男の武器(ピストル)に添えられた手を愛撫するのである(288)。

18) このナイフの存在には繰り返し言及があり、それはラッシュェン自身の暴力性を象徴しつつ、事件の伏線となっている(21,101-102,238,248,264,289,309)。

包帯が取り替えられ、骨に鋸があてられ、前線が接近しており、彼はジャーナリストで、寛大な微笑みを向けられるのだった、なんだ、敵じゃないのか、敵か？ おまえの武器はどこだ？ 持ってないのか？ (270)

彼はその暗闇の中を無理に歩き回るが、やがて、身動きの取れなくなった彼の上に、誰かがのしかかってくる。そのとき、彼は明確な理由もなく、唐突に、この何者かをナイフで刺すのである (271)。その直後、ラッシュェンは人々の制止を振り切って地下室から逃げ出す (272)。

実は、彼はこの地下室にはいった直後、死にかけているかのような年老いた男たちを見ており、テキストはその様子を詳細に描写していた。これを踏まえて、ラッシュェンは、暗闇の中でではあるが、自分が刺したのは、その老人たちのひとりだったと判断している。

おぼろげに彼はまだ壁際にいた老人たちのことを覚えていた、(…)。こんなミイラどもは、いずれにせよほかの仕方で死ぬところだったのだ、どこが変化したのかわからないような仕方で。触ってみて確認するわけだ、こいつは死んでる、と。(274-275)

この記述は、ラッシュェンが刺したのが、生きた人間、ナイフで刺されずとも間もなく死ぬことが予想されるとはいえまだ生きている人間だったのか、それとも死体だったのかを断定していない。この曖昧さは重要である。生きている人間を刺し殺したことが明らかであれば、それはラッシュェンのモラルに反し、逆に死体を刺したに過ぎないことが明らかであれば、当事者化の証としての暴力の条件が満たされないからだ。この経験は、当事者化を求めるラッシュェンにとって理想的な意味を持っていた。

(…) 自らの《介入》についてのひそかな喜びを伴う満足の、繰り返す瞬間、もう二度と、ただ激昂するばかりだったり、人間の非道に戸惑うばかりだったりすることは無い、ついにひそかにそこに属すること、巻き込まれてあること、他人の死に対して必死の利害関係を持ったことについての狡猾な喜び。(275)

現前する出来事へのこの「介入」によって、主観的には、ラッシュェンはついに当事者となったのである。ただし、実際に危険であるため、この「介入」は秘密にされねばならない。ラッシュェンが誰かを殺せば、ここでは、その殺された人物の属する集団の敵になってしまい、報復の対象になるからだ。一般的な理解に即して言えば、このような彼の状況は当事者のそれではない。しかし、それでもこの「介入」の体験は、さしあたりラッシュェンに自己満足をもたらす。

彼のアリアーネとのことについての目論見は、今やずっと《普通》で、思い上がりや小心ぶりとは無縁なものとなっていた。(275)

今や、ラッシュェンは、この「介入」体験によって、アリアーネの前でも堂々としていられる。さらに、彼はこの「殺人」を、ここでもまた例によって自分自身のモラルに対してだが、以下のように正当化する。

この男が武器を持っておらず、彼の命を奪おうとしなかったにせよ、それはただ単に歳を取り過ぎていたからに過ぎなかったのだ。この老人たちが平和的だったのは、そして、ほかのすべての連中同様の卑劣漢にならずに済んでいたのは、ただ単に年齢のせいなのだ。(275)

もし被害者がもっと若ければ武装した「卑劣漢」Schurkeだったに違いないと言うのである。この箇所では、ほかのすべての人間も武装した「卑劣漢」だと取れる表現が選ばれている。この関係者全員に対する否定的評価は、すでに参照した引用(183)においてPLO批判の文脈で述べられていた、「区別するのではなく、全員に対して失格宣言をする」という発想に通じている。ここでは、それがさらに極端なかたちにエスカレートしている。殺戮の応酬に係わる人間すべてに対する激しい憤りが、彼らすべてに対する蔑視となり、その人格を無視した生命の軽視に転じているのである。ラッシュェンのこの自身の体験に関する評価においては、武器を取って内戦に参加している当事者たちは許されず、それを報道する傍観者たちも許されないが、自己満足のためのひそかな殺人によって介入する部外者は許されている。これは一種の倒錯した論理であろう。しかし、ラッシュェンのモラルは、これを許容する。ここではあの「捏造」のシステムからの逸脱こそが重要なのであり、この彼のひそかな当事者化は、それを可能にしたのである。

ただし、彼の自己満足は、アリアーネの拒絶によってあっけなく終わる。ラッシュェンは、例の殺人については露見しないことだけを願って戦々恐々とし、ついに告白された、妻との離婚と中東での定住の計画も相手にはされなかった(278-281)。

6. 文学の問題としての「捏造」

帰国後のラッシュェンは確かに会社に辞表を出す(304)。しかし、ものを書く仕事に対する執着は残っている(308)。夫婦関係に改善の兆はないが、離婚の意思が確認されることもない(310-316)。この結末はなにを意味しているのだろうか。

物語の表層では、ジャーナリズムの一般的なる欺瞞的体質こそが、この作品における「捏造」の中心的内容であるかのような印象が生じている。だとすれば、それに対する疑問を抱いたジャーナリストが、過酷な取材現場で改めて厳しく自己を検証し、その結論としてジャーナリズムと決別する、という筋書きだったということで片がつく。しかし、実際には、この作品における「捏造」概念の本質的部分は、ジャーナリズム批判というよりは、はるかに原理的な問題、すなわち、観察者あるいは傍観者たる書き手と、その対象と

の関係の問題の次元で展開されている。

この点を踏まえるならば、この物語における「捏造」は、まさに作者ボルンにとっての文学の問題だと言える。ボルンが、みずからの分身として物語の中に投げ、三人称で観察した主人公ラッシュェンは、その意味では、本来ジャーナリストではないのである。¹⁹⁾ 作者ボルンによって、この主人公は、無条件で世界と向き合い、無条件でそれを言葉にする、という誇大妄想的な、まさに文学的な構えを、ジャーナリズムの現場にそのまま持ち込まされ、悩まねばならなかった。ナイフによる殺人のエピソードで頂点に達する、いわばモラルの狂気は、作家あるいは詩人における、書く行為に対する誠実さに起因する。その狂気による問題解決が想定されうる戦火のレバノンには、「もの書き」にとっての逆説的なユートピアである。しかし、ボルンは主人公をそこに留まらせもせず、そこで死なせもしなかった。そしてもう一度、ドイツへ、すなわち、ラッシュェンが本来的に「当事者」であるはずの日常へと送り返している。ラッシュェンは、そこで、あらためて「捏造」を巡る闘争としての書く行為に従事することになるのだろう。

「捏造」の原理的回避は、おそらくありえない。しかし、この「捏造」の不可能な回避を指向しつつ、また、その指向の引き寄せる狂気と倒錯をも計算に入れたうえで、常に本質的な「当事者」として書き続けること、文学の、そのようなきわめて厳しい課題をあえて暗示しながら、ボルンの遺作は幕を下ろしているのである。

Das Schreiben als ein endloser Kampf gegen die Fälschung

Über „Die Fälschung“ von Nicolas Born

KINEFUCHI Hiroki

„Die Fälschung“, der letzte, 1979 veröffentlichte Roman Nicolas Borns behandelt den Bürgerkrieg im Libanon. Zu Vorstudien für das Werk war Born eigens nach Beirut gereist und zweieinhalb Monate dort geblieben.

Die Hauptfigur Georg Laschen, ein Journalist aus Hamburg, fährt zum zweiten Mal nach

19) Lützelersは、ラッシュェンが「自分の《真実》を書くための、新しい文学的なやり方」とジャーナリズムの側からの期待との間で引き裂かれている、と指摘している (Vgl. Lützeler, S.194)。だとすれば、これは少なくとも結果的に文学的な方法を指向する内的な欲求と、ジャーナリストとしての職業上の外的要請との対立だと言える。その意味で、彼は、本質において「文学的」なのである。

Beirut. Dort wird besonders in der Nacht heftig gekämpft, und Laschen gerät mehrmals in Lebensgefahr. Als Berichterstatter sammelt er Informationen zu verschiedenen Themen, um darüber zu schreiben. Doch sieht er in dieser Arbeit eine Art „Fälschung“. Dabei handelt es sich um keine Fälschung im wörtlichen Sinn, sondern um eine, die einerseits in der Struktur der Medienindustrie ihren Grund hat und damit ein wohl unvermeidliches Dilemma des Journalismus markiert und die andererseits ein für den jeweiligen Journalisten individuelles moralisches Problem darstellt. So gesehen, mag hier der Titel die Erwartung des Lesers mitunter enttäuschen.

Die in dem Werk behandelte „Fälschung“ hat also zwei Seiten: eine berufliche und eine persönliche. Laschen hat und hatte zwar nichts zu tun mit irgendeiner Fälschung im herkömmlichen Wortsinn, aber im Laufe seiner Karriere kam ihm der Verdacht, er produziere seine Artikel gleichsam nur automatisch, je nach Nachfrage, täusche also mit seinen Berichten und Informationen nur vor, dass es ihm um Tatsachen und die Wahrheit selbst zu tun sei.

Dazu kommt seine Krise im persönlichen Bereich. Die fast gescheiterte Ehe mit seiner Frau in Deutschland wird immer wieder erwähnt, während ein anderer Erzählstrang sein Abenteuer mit Ariane zum Gegenstand hat. Diese deutsche Beamtin, Witwe eines Arabers, arbeitet am Konsulat der Bundesrepublik in Beirut. Beiden Frauen gegenüber verhält sich Laschen zurückhaltend und verheimlicht ihnen seine eigenen Gefühle. Und er weiß, dass dies für ihn eine existenzielle Frage ist, die beim Kommunizieren, aber auch beim Schreiben und ganz allgemein beim Erkennen sein Verhalten bestimmt.

Dieses Problem will er jetzt unter außergewöhnlichen Umständen lösen, nämlich in diesem Krieg. Nun gilt es für ihn, als Journalist und als Mann jene „Fälschung“ zu vermeiden: Er darf nicht mehr nur Betrachter oder Beobachter sein, sondern jemand, der in der jeweiligen Situation selbst auch Betroffener ist. Aber wenn Laschen einfach als ein Berichterstatter aus Deutschland im Libanon bleibt, kann dieser Bürgerkrieg ihn nicht existenziell betreffen. Seiner Neigung, zum Gegenstand Distanz zu bewahren, also seines eher kontemplativen Naturells, ist er sich in jeder Hinsicht bewusst. Freilich eignet er sich auch wegen dieser charakteristischen Eigenschaft gut für den Beruf des Korrespondenten. Aber eben deshalb übt er ja Kritik an sich und zugleich am gesamten massenmedialen System.

Beim Schreiben eines bestimmten Artikels sieht er plötzlich Anzeichen einer Möglichkeit, die genannte „Fälschung“ zu vermeiden. In diesem einen Fall geschieht dies aber eher zufällig, nicht aufgrund einer prinzipiellen Überlegung. Auf der anderen Seite versucht er, auch im privaten Bereich seine Position radikal zu ändern. Er will nun eine Scheidung von seiner Ehefrau und ein neues Leben, mit Ariane. Dazu entscheidet er sich, nachdem Ariane von ihm gefordert hat, er solle doch Araber werden, wenn es ihm lästig sei, hier als

Deutscher zu leben. Gemäß seiner Konsequenz-Logik muss man sich in irgendeiner Form in diesen Krieg bewaffnet einmischen, um „Araber“, also Betroffener, zu werden. Dieser Forderung kommt er nach, als er tatsächlich im Dunkel eines mit Flüchtlingen überfüllten Kellers mit dem Messer nach einem alten Mann sticht. Er verrät es keinem, ist aber auf seltsame Weise mit dieser Tat zufrieden, weil er sich nun auch als eine Art Betroffener vorkommen kann. Trotzdem wählt Ariane einen anderen Freund, wieder einen Araber. Ihm, dem sie sich verweigert, bleibt keine Wahl, als nach Haus zurückzukehren. Er will jetzt seine Stelle als Journalist aufgeben, ohne jedoch mit dem Schreiben aufzuhören.

Born hat seinen Helden zunächst in ein Land geschickt, wo diesem das Problem der „Fälschung“, das in seiner Sicht dem Verfassen von Reportagen allgemein droht, klarer und konkreter als woanders zum Bewußtsein kommt. Dann holte er ihn, nach dem Scheitern des Versuchs, dieser Gefahr des „Fälschens“ zu entgehen, wieder zurück.

In dieser Geschichte spiegelt sich des Autors starker Wille zum Schreiben wider. Was hier exemplifiziert wird, ist eine Grundproblematik des gegenwärtigen Schreibens, besonders der journalistischen Berichterstattung. Aber gerade in der Konfrontation des Journalisten mit dieser Schwierigkeit erkennt er die besondere Aufgabe des literarischen Schaffens.

Laschen ist kein bloßer Journalist. Er ist auch Dichter, ein zweites Ich seines Autors. Freilich zeigt der Roman schon strukturell, dass hier keine einseitige bzw. eindeutige Kritik des Literaten am Journalismus beabsichtigt ist. Unter der Oberfläche dieses scheinbaren „Journalistenromans“ spielt sich ein unaufhörlicher Kampf der literarischen Sprache gegen die „Fälschung“ ab. Born hat hier, kurz bevor er starb, seine eigene Poetik entworfen.w